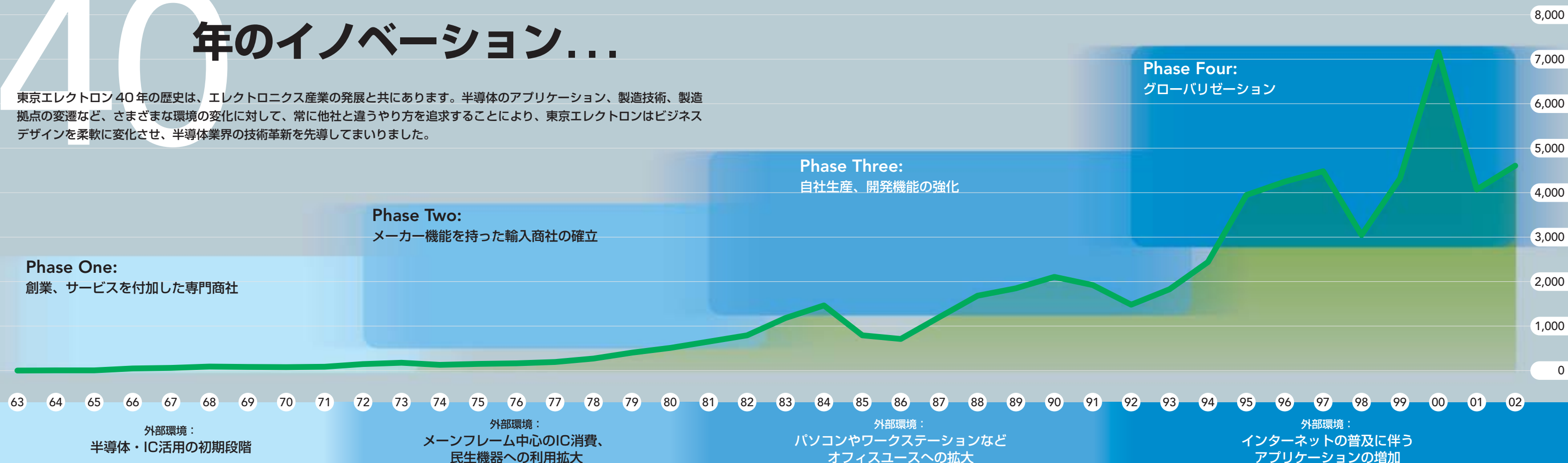


40年のイノベーション...

東京エレクトロン40年の歴史は、エレクトロニクス産業の発展と共にあります。半導体のアプリケーション、製造技術、製造拠点の変遷など、さまざまな環境の変化に対して、常に他社と違うやり方を追求することにより、東京エレクトロンはビジネスデザインを柔軟に変化させ、半導体業界の技術革新を先導してまいりました。

売上高 (単位: 億円)



1963 - 1971



半導体関連技術が米国中心に存在した半導体産業の黎明期において、エレクトロニクス製品に技術的アフターサービスを付加して国内のお客様に提供するという新しいビジネスデザインの達成を目標に東京エレクトロンは創業しました。創業当時は、IC テスタや拡散炉、電子部品といった当時最先端の製品の輸入のほか、国内製 VTR、カーラジオ、電卓などの輸出も手がけていました。技術力を持った専門商社という位置づけで、スピードと徹底的な技術サービスによる顧客満足の追求により、ビジネス基盤の構築に努めました。



<写真> ファウンダー (創業者): 久保徳雄氏と小高敏夫氏、IC テスタ、当社が販売していた電卓

1972 - 1981



IC のアプリケーションがメインフレームを中心に、家電製品、電卓、オフィス機器等に拡大しつつあったこの時期、半導体製造装置ビジネスにおいては、装置仕様の多様化に対して、国内における装置の開発・製造を推進しました。電子部品やコンピュータシステム、CAD / CAE システム、ボードテスタなどの輸入ビジネスも順調に拡大させる一方、過当競争によって利益率が低下しつつあった電卓・ラジオなどの製造・輸出ビジネスから撤退し、「メーカー機能を持った輸入商社」というユニークなポジションを確立しました。

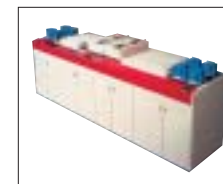


<写真> 高圧酸化炉: UHO-2506、ウェーブローバの製造現場、コンピュータ周辺機器

1981 - 1991



日本の半導体メーカーが DRAM の製造で世界を席巻したこの時期、半導体製造のプロセス技術も複雑化してきました。東京エレクトロンは海外の最先端メーカーと合弁会社を設立し、半導体製造装置のラインナップを拡大しました。また、半導体メーカーの装置メーカーに対する技術的な要求のレベルが高くなるなか、独自の研究開発施設を建設し、お客様との共同開発を進め、自社製品の高付加価値化を推進しました。メーカー機能とサポート機能をさらに強化することにより、現在のビジネスポートフォリオの柱となる半導体製造装置の製造・販売ビジネスが確立しました。



<写真> 総合研究所の内部、コータ/デベロッパ: CLEAN TRACK MARK II、エッチング装置: TE-480

1992 - 2002



IC のアプリケーションがパソコンや携帯電話など消費者向けに移行したことに伴い半導体市場は急拡大しました。また、メモリからロジックへと技術的な牽引役の移行と半導体産業の分業化が進行し、台湾におけるファウンドリー (IC の受託生産) ビジネスや韓国や米国における半導体生産が急成長しました。当社も海外のお客様への直接販売とサポートのために、グローバルレベルでの拠点展開を強力に推進しました。一方、国内においては最先端のプロセステクノロジーセンターを建設し、プロセス開発力の強化を図りました。この時期になると半導体製造装置業界におけるリーディングカンパニーとしての地位を揺ぎ無いものとなりました。



<写真> 東京エレクトロンアメリカの社屋外観、東京エレクトロンアメリカのオープニングセレモニー、プロセステクノロジーセンターの内部